

氏名：林 信吾（2023 年度入学）

学籍番号：s1323902

論文題目：廃墟的絵画

（論文内容の要旨）

筆者の故郷・福井県の山間部は冬になると雪が多く降る地域である。また、過疎地域である地元は廃墟や廃屋が増えており、自営業を営んでいる実家もまた、昔多くの従業員が働いていた工場が廃墟化していた。このような故郷の風景と筆者の自作品を見比べた時、故郷の雪景色と廃墟の存在は、日本画制作を行う上での大きな発想元となっていることがわかる。

廃墟は西洋においてクロード・ロランが描いた「理想風景 (Ideal Landscape)」に描きこまれ、日本では例えば松尾芭蕉による「夏草や兵どもが夢の跡」のように、文学において表象されてきた。それは、「過去の栄光や過ぎ去りし日々を暗示し、憧憬や悲劇的な感情を喚起する。」といった物語的な側面が大きい。しかし筆者は、自作品の制作において、堆積した埃や風化した壁面の中間色、植物の侵食や破損によってノイズを帯びた質感といった、廃墟そのものの物質的側面である「不完全性」に惹かれている。

建築物は経年劣化や塵や埃の堆積によって「古びた趣」を、植物の侵食、破損などによって「不完全性」を獲得する。このような「古びた趣」や「不完全性」といった点は日本において「さび」といった言葉で表現され、茶の湯の陶磁器や俳句、和歌などの領域で美的な評価の言葉として用いられてきた。そして筆者の創作物もまた廃墟の要素を自作品に反映させることで、廃墟が持つ静かで荒涼とした佇まいを自作品に獲得させてきた。そのような「古びた趣」や「不完全性」の要素を取り入れた平面表現を筆者は「廃墟的絵画」と呼称した。本論文その言葉が表す図像や佇まいを日本画において表現する方法とその理由について論述した。

第1章では、筆者の絵画制作において深く影響を与えている故郷の風景を紹介し、身体的制約である「飛蚊症」や、映画などの触れてきたメディアがどのように廃墟や自身の創作と関連するかについて説明した。また、筆者が行う日本画制作がどのように廃墟的な要素に対応しているか具体例を挙げて関連づけた。それはバケツの底の中間色や、削り出しや洗い出しによる描写などの、日本画技法と結び付けられる。これらの内容をまとめ、筆者が描く絵画が、「廃墟を描いた絵画」ではなく、廃墟の特徴を踏まえた絵画「廃墟的絵画」であると提言し、自身が望む表現の外形として定義した。

第2章では、筆者が提言する「廃墟的絵画」の持つ意味や立場を説明するために、

廃墟の表象史に触れ、西洋と日本において廃墟が、どのような意味や意図を持って表現されてきたかについて説明した。絵画や短歌に表されるように西洋と日本において廃墟表象は「過去の偉大な時代への憧憬」として機能してきた。しかし、日本の茶の湯の陶磁器においても、壊れた美術品を修復、継承することで「過去への憧憬」という表象を実現してきたという。そして茶の湯が発展していく中で、陶磁器の表象は「過去への憧憬」から徐々に脱却し、物質の要素そのものに美を見出す「さび」の美意識が展開した。この茶の湯の陶磁器への視点は、筆者が第1章で提言した「廃墟的絵画」と通じていると考えられ、「さび」と「わび」の要素を平面表現においてどのように表すことができるのかを、自作品の実験と茶器や日本画家である手塚雄二のインタビューをもとに考察した。

また筆者のモチーフ選択の理由に筆者自身の気質である「野暮」を挙げた。「野暮」は田舎や農村的な生活感覚を揶揄する言葉であり、洗練されていないことや人情の機微を弁えないことといった意味を持つ。筆者は傾向として、露悪的とも呼べるようなモチーフに惹かれ多く選択し描いている。このようなモチーフは観賞者を遠ざける要因となり得るが、アメリカの作家レナード・コーレンの著書『わび・さびを読み解く』によると、茶人たちは「――野暮ったいがひどくグロテスクと言うほどではないもの――の実例をわざわざ探し求め、それらを正反対のものに変容させること」に挑戦してきたという。そこで筆者は野暮なモチーフを、鑑賞に耐え得る創作表現として、日本画材を用いて廃墟的な「わび・さび」の質感をもたらし、野暮の性質を昇華するという提出作品の目的を示した。

第3章では、第1章と第2章の内容を踏まえた「廃墟的絵画」として、博士審査展の提出作品を制作し、その内容についての具体的な解説を行った。提出作品のモチーフ選択や画面構成の意図、廃墟の特徴を持たせるための具体的な技法について解説し、「廃墟的絵画」を制作していく過程について詳しく追っていった。そして完成した提出作品の結果について述べ、絵肌や図像などの様子を示し、具体的にどのように自作品が廃墟的な特徴を獲得しているかについて述べた。

おわりに本論文のまとめと今後の展望について述べた。